地理総合に向けて
―地域調査をどのように取り扱うか―

地理歴史科（地理）　沼　畑　早　苗

1. はじめに

高等学校の地理教育における地域調査は，少なくとも学習指導要領においては一貫して重視され続けてきたものの，これまで活発に実施されてきたわけではないのが実態である。新学習指導要領においては，予測困難な時代を生き抜くためは，正解のある問題に効率的に答える力を養うだけでは不十分であるとの危機感から，答えのない問いを考えたり，課題そのものを自ら発見したり，課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた学習が求められている。

地域調査は，そのような学習を実践する格好の場となる。本校の実践を報告することで，全国で必履修化される地理総合における地域調査の垣根を低くすることを目的とした。

2. 本校の実践報告

2015 年度より，従来から実施していた親睦目的の 1 年学年合宿を，「フィールドワーク」と位置付け，具体的な体験を伴う学習を実践する場とした。2019 年度は 2 泊 3 日の行程のうち，半日のみを必修地理 A の地域調査とし，長野県下諏訪町の御田町商店街において，グループ単位で「地域の防災への取組と課題」に関する聞き取りを実施した（2020・2021 年度は新型コロナウイルス対策のため中止）。

本校は小規模な学校であるため，地理担当の教員は学校に一人である。そのため，通常の授業時間の中で 1 クラス 40 名を一人で引率するとなると安全面への懸念があるが，学年合宿の中に地域調査を取り入れることで，他の教員の目が届き，不安を克服できるようになった。学年 120 人で同時に実施するにあたっては，フィールドワークの心得や到達目標を記した「評価表」を事前に配布し，生徒自身が事前学習，現地学習，事後学習のそれぞれの段階において，自分自身の行動を確認できるような工夫をすることで，現地で地理教員による細かい指導ができないデメリットを補い，自立的な行動を促すようにしている。

生徒の事後レポートからは，フィールドに出ることで，実際に現地を見なければわからないことがあることを実感し，地域の特徴や実態を現実的に踏まえた上で課題をとらえ直していることがうかがえた。また，一つの大きな課題が解決した地域であっても，全てがうまくいっているわけではなく，地域内において住民間の意見の違いや時には摩擦があることを見定め，解決に向けた考察も多面的に行うことができるようになった。さらに，地域の方たちとの交流や生徒間の議論を通して，課題を発見したり解決したりする学習の楽しさを知ったり，協働的に学ぶことの価値や社会に貢献し

たいという意欲を高める効果があることもわかってきた。

3. おわりに

グループ単位での自立的な地域調査の経験は，普段の授業や 2 年次以降の本格的な課題研究においても活かされ，持続可能な地域の在り方を自分ごととして考える契機ともなる学びの大きい活動である。一方で，生徒が毎年同じような質問を繰り返すことが地域の方々の迷惑になるのではないかという懸念はある。マナーをはじめとした調査倫理の指導は引き続き注意深く行っていくが，地理総合の地域調査を通じて，高校生を受け入れてくださった地域に何を還元できるのかが今後の課題であると感じている。

【文献】

沼畑（2019）高校地理教育におけるフィールドワークの効果，E-journal GEO，Vol. 14(1) 30-41